

太湖流域春申君治水伝説研究

専門分野

民俗学

キーワード

中国 太湖流域 春申君 治水伝説

研究目的・概要

春申君(生年不詳一紀元前二三八年、姓は黄、名は歇)は戦国末期(前三世紀)楚国の宰相として政治の実権を握り、三十年余りにわたって楚の国策に参与し、当時の国際政治に大きな影響を及ぼした人物である。本研究では、従来余り論じられてこなかった春申君の治水伝説に注目し、それが楚国と敵対関係にあった呉・越地域に伝承されてきた点に注目し、一国の宰相がなぜ治水人物となったのか、またその治水伝説がなぜ当該地域において伝承されてきたのかという問題の解決を試みている。

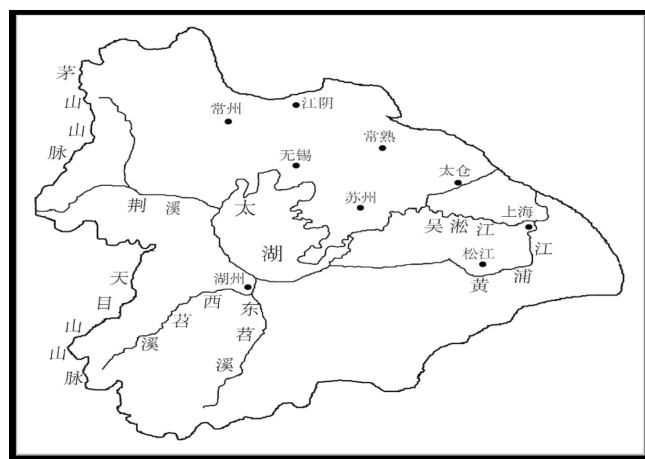
古典文献・地方誌・フィールドワーク(上海・蘇州・無錫・湖州・江陰などの関連遺跡の調査)を通して、現在のところ次のような結論に至っている。まず、太湖とその水系で形成された太湖流域は、古来水害や旱魃など自然災害を受けてきた地域であり、当該地域における治水は、人々の生活を維持するための極めて重要な営為であった。禹・呉太伯・范蠡・伍子胥などの人物は、伝説上の治水人物であり、春申君もその治水伝説の系譜に連なる治水人物としての人物形象を有していた。

彼らは太湖住民によって、治水を行い現地に貢献した人物とみなされ、祠廟が建立され、人々の祭祀対象となってきた。つまり、太湖流域に流布した春申君の治水伝説は、歴代治水事業を必要としてきた地理環境、禹・呉太伯・伍子胥・范蠡といった治水伝説の系譜を基礎とし、言語(口伝・典籍)・関連遺跡・祠廟における祭祀などの形式によって伝承され、特に伝承者における治水人物としての春申君に対する感恩の情や、祭祀対象として記念する行為が、この治水伝説の主な伝承要因であったといえる。

近年では、現代上海における春申君治水伝説の歴史・文化資源化の問題に注目し、上海の別称「申・申城」が春申君に由来し、南北を流れる黄浦江がその名(黄)を冠すること、さらに「春申文化」が上海の歴史文化を語る上で、貴重な文化資源となっている点について研究している。



中村貴『太湖流域春申君治水伝説研究』
中国社会科学出版社 2020年



「太湖流域における春申君関連遺跡分布図」
(中村作成)



国際学部 国際文化学科
中村 貴 准教授

担当科目: 中国文化論、日中関係論、中国語

HP

https://www.nuis.ac.jp/teacher_nakamura/

Researchmap

<https://researchmap.jp/read0140707>

現代上海在住日本人の生活史研究

専門分野

社会学

キーワード

中国上海 日本人 生活史 オーラル・ヒストリー

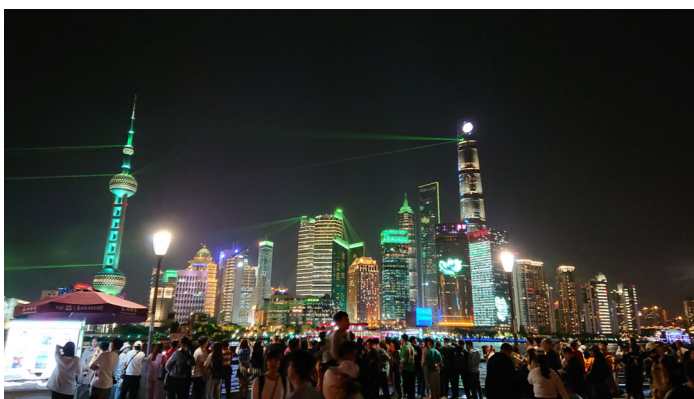
研究目的・概要

本研究は現代上海在住日本人の生活史という「生きられた歴史」を、日中関係史の文脈に位置づけ、民間人の生活史や民間交流という新たな側面から現代の日中関係史を捉え直す試みである。具体的には、現在上海に住む日本人について、日中両国の政治・経済的関係を背景としながら、個人の語りから彼らの移住動機・文化適応・生活意識・アイデンティティーなどについて明らかにする。上海在住日本人社会の研究は、近代上海の日本人に関する研究が大半を占め、現代上海在住の日本人社会の研究は未だ少数に留まっている。

本研究が目指すのは、「大きな歴史（両国史・両国の政治経済史）」のなかで、現代上海在住日本人がいかなる日常生活を送っているのかという「小さな歴史」あるいは「日々の歴史」である。

一例を挙げると、日中両国の「はざま」で日常生活を送る彼らの「立ち位置」について、2012年の反日デモに関する彼らの反応や経験にもとづいて論じている。上海在住の日本人にとって、この「事件」は個人及び当該社会での日常生活に大きな影響を及ぼすものであった。彼らの多くが「恐怖を覚えた」とされているが、彼らにとっての「恐怖」とは、主として「いま—ここ」で発生している出来事に対する心理的反応であった。

一方で、日本在住の日本人いわゆる「在日日本人」はメディアの「刺激的」報道によって、容易に中国・中国人に対し恐怖を覚えることになった。つまり「在日日本人」における「恐怖」は、メディアを通して構築・増幅されたものであり、ある意味でそれはイメージとして「創られた恐怖」であったといえる。また、両国の「はざま」に生きる彼らと「在日日本人」との間にはメディアの介在があり、両者間には微妙な距離が生じている。つまり、彼らは自らの生活体験をとおして中国・中国人と接しているのに対し、「在日日本人」の多くはメディアを通して中国・中国人を理解することから、両者間における「中国」・「中国人」観に差異が生じている。その意味で、彼らは両国の境界に位置する存在であるといえる。しかしながら、聞き取り調査から分かるのは、彼らがたんに両国の境界にとどまっているのではなく、同様の境遇にいる人々（在日中国人、日系企業で働く中国人、日本語学科の中国人学生など）に関心をよせ、また現地の人々と能動的につながりを構築しようとする姿であった。



夜になりライトアップされる陸家嘴
(上海市の国際金融貿易エリア、中村撮影)



日本人も多く住む上海市長寧区古北エリア
にある黄金城道付近 (中村撮影)



国際学部 国際文化学科
中村 貴 准教授

担当科目：中国文化論、日中関係論、中国語

HP

https://www.nuis.ac.jp/teacher_nakamura/

Researchmap

<https://researchmap.jp/read0140707>